

# 別冊ふるさと風

ふるさと風1000号記念号 (第一部)

## 【投稿文集】

はじめに

白井啓治

ふるさと「風」が1000号を迎えるに当たり、月例の会報以外に、記念号を出そうという事になり、これまで応援いただいた方々に、1000号おめでとうではない自由な発表文をお願いした所、多忙の中、時間を割き寄稿いただくことが出来ました。

編者の個人的な事ではあるが、石岡に越してきて、この地の民話をモチーフにした物語を書いてみる動機を頂いたのが、縄文語の研究書等の著書を出されている鈴木健氏の「常陸国風土記と古代地名」の著書を、偶然本屋で手にした事であった。

未だふるさとルネサンスの講座を預かる前のことで、その時に戯れ書いたのが「新説柏原池物語」であった。柏原池に伝わるという伝説は、石岡市教育委員会より出されている「石岡の地名(ひたちのみやこ1300年の物語)」に紹介されているのを見たのである。

新説柏原池物語を書いた後、伝説の出典もとなつている今泉義文氏の「石岡の伝説」なる本なのか資料なのかを捜そうと思ったのであるが「石岡の地名」には何の記載もない。「石岡の伝説」も

さることながら、この「石岡の地名」なる資料本も不思議な本である。

今泉義文氏は、現石岡市長今泉文彦氏の父上だそうであるが、歴史の里と称するこの市にはこのような本(？)、まとめ資料(？)は、市の財産として原本は別にして、内容は整理保管されるべきではないかと思う。

余談になるが、新説柏原池物語を書き下ろす時に、池の端にあるという弁天様を見に行つたが中々見つけれず、藪の中の粗大ごみの捨てられてある隅に、祠らしきものを見つけ、これがそんなのだろうと思つて帰ってきたが(今はきれいになって祠と分かるようになっていて)これでは、伝説が伝承されるわけではないなと思つたものである。

小生にとつて、ふるさと風の会への導となるかのように、偶然手にした鈴木健兄の本でしたが、この「ふる里風」にも、日本語になつた縄文語をテーマに一年以上にわたつて寄稿を頂き、ふるさと風1000号記念に立ち上げようと考へております、別冊ふるさと風の創刊号に、寄稿頂けたことは、小生にとつては感慨深いものがある。

「ふるさと風」も1000号よくぞここまで、というよりも「さてこれからです」と気持ちを切り替えて進めていきたいと思つております。

## 『水戸藩史料』成立の経緯

鈴木健

### 【成り立ち】

幕末から明治維新にかけての水戸藩の動向・事跡を集成した書物に『水戸藩史料』がある。同書は上編乾(いぬい)・上編坤(ひつじさる)・下編全・別記上・別記下の5冊からなり、それぞれ縦26cm、横20cm。全巻約5000頁。印刷確実、装丁完璧。しかし、編著者・出版者・印刷者・発行部数・発行日・価格等一切不明。内容は水戸藩第九代藩主徳川斉昭や側近、幕府関係者、他藩の有力者の発言や往復書簡等を時代を追つて採録し、私心なく解説したもので、当時の藩政の動向を知る唯一の資料と言つても過言ではない。水戸藩研究者に多用されているにもかかわらず、諸著書の引用献欄には書名だけで著者・出版社の記載なし。「なんでも二人で書いたらしい」という噂はあつたが、編著者は特定できなかつたし、原稿も発見されず終いのままであつた。幸いここに来て、亡父鈴木健夫の遺品を整理するなかで、それらを解明できる資料が出てきた。それを見て思い至つたのである、私がここで終活として取り上げなければ、『水戸藩史料』成立の経緯は永久に闇のままではないかと。たまたま過日、白井氏から『ふるさと風』1000号記念に何かをとお達しがあり、これぞ天の助けとばかり、ご厚情におすがりした次第。

さて、1981年10月6日、水戸史学会会長名越(なごや)時政氏から鈴木健夫に届けられた「名越用箋」に書かれた『水戸藩史料編纂始末』(漢然著録 続編)には、次のような書き出しで以下のような事が書かれてある。「明治二十一年(1888)六月余は茨城県属官を辞して東京小梅なる水戸徳

川家の邸内に寓し、烈公事績編輯の事に預り爾來三十一年まで十年間在京することなれり」。時政氏の祖父、名越時孝氏の言葉である。時孝氏は県の役人。茨城県師範学校（現・茨大教育学部）長兼県学務課長杉本直己氏が県書記官（内務部長 藤田健（藤田東湖の子息）に勧め、藤田氏が水戸徳川家に推挙。初めは邸内の御事績取調所なる局に入った。入局直後の七月に、宮内省より薩長水士の四藩の嘉永六年癸丑（みずのとうし）（1853・ペリー来航）より明治四年辛未（かのとひつじ）（1871・廢藩置縣）迄の歴史調査の沙汰あり、三カ年を期として三千元を賜る。水戸家は先ずこれに従事すべく、「水藩事績取調員」となる。編集局を聿修館（いっしゅうかん）と称し、松戸老侯鑾山（らんざん）（徳川昭武・最後の藩主）が総裁、長谷川清氏館長。顧問には栗田寛、青山勇、佐藤奉、塚達等。第一年（明治二十一年）史料蒐集、第二年輯纂討議、第三年編述大成という計画であったが、烈公（徳川斉昭）の活動は癸丑（みずのとうし）（1853）以前にあり、藤田健氏の推薦にて鈴木長（ひさし）が小学校校長を辞職して入館。書記一〇名を擁し、癸丑（みずのとうし）（1853）以後は名越時孝氏、それ以前は鈴木長が分担することになった。名越氏担当分のちに、「水戸藩史料上編乾（いぬい）・上編坤（ひつじさる）・下編全」鈴木担当分は「水戸藩史料別記上・別記下」として結実することになる。

上の「緒言」に「此書嚮（さき）に朝命を以て嘉永癸丑（みずのとうし）より明治癸丑（みずのとうし）に至る迄の水戸藩国事執筆始末を編纂するに際し其の淵源ともいふべき天保の政統闕如するを憾みて編集したるものに係る。是即ち水戸藩史料別記と名（な）け筆を嘉永癸丑にと、めたる所以なり。而して其の体たる固（もと）より私撰に属するを以て癸丑以下の書とは自から例を異にするも。紀事努めて原書を引証し体裁多く其の撰に倣（なら）ひたるものは。敢て我国空前絶後なる維新史の料に採択せらるるを望むには非ざりしが微意竊（ひそか）に癸丑以下の書と相須（ま）て能くその原由を詳かにし朝廷至渥の命に副ひ奉らんことを欲すればなり。明治三十年五月 編者識」さらに「凡例」として「一、此書筆を公（烈公＝徳川斉昭）の誕生（1800）に起し嘉永六年癸丑に至りて之を止む。癸丑以降の実歴は別撰あり即ち水戸藩史料上編下編是なり。一、天保年間の事業は公の専決施行するものにして其の基礎茲（こゝ）に立ち或は諸藩の模範たりと雖も之を国家に応用せるは嘉永安政にあり故に其の根源を 詳（つまびらか）にせざれば其の顛末を完備すること能はず。是此の撰ある所以なり」と記されている。

期間の延長、水戸のみならず薩長よりも起（こ）る。明治三十年五月、癸丑以前の別記上下先ず完成、印刷。癸丑以後とくに文久・明治間はなかなか完成を見ず。経費の関係で同年聿修館閉館。名越氏帰水自宅で整理、翌年竣成する。その後、上梓までに他人の手で改竄される。印刷前に名越氏再校をゆるされたが思うようにはならず。事後、名越氏は現土浦一高・水戸一高の教諭、鈴木長は現五軒町小・新莊小の校長となる。その間二人は提携して、水戸藩にて植樹した日立市入四間の八丁山官林を払い下げそれを基金に水戸育英会を起し水戸藩子弟の英才を教育し、東京に水戸塾を設け水戸にて人物を選ぶ。

私の幼児期、名越宅はすでに時孝の御子息陸軍中将時中氏の代になっていた。住まいは拙宅ともども水戸の新屋敷内にあり近かったので、祖母長の妻につれられてお邪魔した記憶がある。なお、常磐共有墓地要覧（大正年間）の土籍名簿欄には埋葬者名越時孝の後継者名越時中、鈴木保の後継者に鈴木長。鈴木保は吉田神社神官、長の妹うめの夫阿久津直彦やその娘婿望月君明も代々その職を継いでいた。

#### 【残存原稿】

このようなことをいくら記しても鈴木長が癸丑以前を分担で執筆したという確証にならない。しかし、鈴木宅でその原稿の一部でも見つければそれは解決する。たまたま過日、父健夫の遺品を整理中それらしき物が発見された。その一つが、「水戸藩の北地開拓」。これは「水戸藩史料別記上」の249ページから309ページに「第二章五 朝廷幕府 蝦夷開拓の議」として成文化されているが、どうやら書記が清書した原稿らしい。書き始めの数ページには加筆・修正も見られ、判読不明のためか空欄にした箇所を埋めたものもある。成本を見ると、引用文献は原書に忠実であるものの、解説部分は簡潔明瞭になっており、事後にかなり推敲を重ねた様子が伺える。他の二つは天保期の海防と民生の実情と提言の記述であるが、聿修館書との名入りの原稿用紙に小筆で書かれている。聿修館書とあるのは水戸藩史料作成のために立ち



など思ってしまったね。

昨年12月古希を迎えた事をきっかけに、自分の人生を振り返り、余命を計算(自分の人生し、ソロソロ終活(人生の終末)を考える時期に来ている事を実感していました。と言うのは、この年になると昔からの仲間が、一人二人と訃報の便り、昔馴染みのお店が無くなり、楽しみにしていた雑誌や新聞が廃業に、私自身も本部から管理者の後釜をせがまれている最中もありました。其処へ来ての今回の急な原発肝細胞癌の摘出手術…。他人事ではなく、ギター文化館の跡継ぎ問題も早急の課題と痛感しています。

我家に書斎と言うには程遠い自室がある。室内は両側が本棚になっており、未整理の書類と、読む当たらない論文全集。殆どが捨てても何も困らない：飾り物になっていく書ばかり。昔の紙焼き写真の山、海外旅行の未整理資料、音楽に関する資料集、テープやCDの音資料、20数年間の労音に関する資料・・・どれも整理の可能性が無いものばかり、何れ持ち主が居なくなれば廃棄されるのは必然の物ばかり。昔、親爺の臨終に立ち会った時、苦しい息の中で書き留めたと思われる、心中の手帳が出てきた、5人の兄弟誰も手にする者はいない。

個人の想いは明くまでも個人のもの、親子妻子と謂えどもその心情に同調はないだろう。そうであるならば、まだ呆ける前に捨てられるものは捨てる。ギター文化館の次代館長が困らぬよう、今から準備をせねば。

(断捨離、不要なモノなどの数を減らし、生活や人生に調和をもたらす)とする生活術や処世術の

こと。基本的には3方の行法、「断行」、「捨行」、「離行」という考え方を応用して、人生や日常生活に不要なモノを断つ、また捨てることで、モノへの執着から解放され、身軽で快適な人生を手に入れようという考え方、生き方、処世術である。単なる「片づけ」や「整理整頓」とは一線を引くといふ。

終活を準備するに当たり、最近のニュースから色々な事を考えてしまいました。つい最近も日本には存在しないデング熱の発症で話題になったウイルスによる伝染病。世界のWHOで大きな問題になっている西アフリカの風土病だった、「エボラ出血熱」。治療薬が無いと言われている恐ろしいウイルス病原の病気ですが、元々この限られた地域で宿主のなかで生きてきたウイルスですが、文明社会が限られた地域を荒らし、宿主から動物を通して人間に、この発達した交通機関を通して世界流行(パンデミック)直前まで：恐ろしい事です。ウイルスそのものが生物と非生物の中間に位置し、遺伝子は有するとか：起源も含めてよく解っていない。それなのにインフルエンザやHIV：もう既に人間社会に蔓延、どうするのですか？

また：最近多発している自然災害、よく言われているが50年に、100年に、1000年に：想定外の出来事だった。地球45億年の歴史を考えれば、想定外などは無いに等しい。人間が勝手に有り得ない事として線引きしたご都合ではないか。正土で構成された斜地の真下に密集した住宅地：一体誰が大丈夫と判断したのだろうか。戦国の昔から治水を制する者はその地の真の治政者だとか。今の文明の世で日本中の河川で絶対と言いつける

は存在するのだろうか。天災より人災の方が多いのでは、：自分の身は自分で守るしかないのか？

人災の一つに原発問題が：(茨城県も東海村を抱え他人事ではない)日本はなぜ54基もの原発が：。この狭い殆どが地震の恐れがある場所に造られたのか。もともと1950年代の日本のエネルギーは石炭と水力だった。ところが、日本は60年代に入ってエネルギー政策を大転換し、石油中心に変えた。アメリカへの従属のもので、水よりも安い石油が中東から入ってくる。イラクからもサウジアラビアからもイランからも湯水のように石油が入る。日本の大企業は「水よりも安いエネルギー」が手に入るといふことで、三池、夕張を始めとした炭坑をつぶし、水力発電をつぶし、全部石油に変えたところに、73年、石油ショックがやってきた。石油が凍結するという事態になって青くなつた政府、電力会社、特に政府はエネルギー政策の根本的な転換を図った。

それ以前から実験的に造っていた原子力発電を、国策として年間2基のペースで造っていくことになる。市場の論理とはまったく無関係に、国策として、大企業の安いエネルギー源を確保するために、国民の安全を無視して、石油から原発へのエネルギーの転換、特に電力政策の転換が行われていく。

問題なのは、国策としての石油から原発への転換というものを、なぜ地域が受け入れたのかという事。そこには、先ほど言った、東北地方における震災の被害が深刻化した利益誘導型政治と同じ問題があった。地方の中でも「へき地」と言われているような場所。ここに来られる公共事業は唯一原発だよという形で、いわば最後の公共事業

投資として原発が導入される。

たとえば第一、第二原発のある浜通り地方は双葉町長自らが、「福島の子ベット」と言う地域である。新幹線はそんなところを走らない、鉄道も走らない、高速道路も走らない。そういうところに、原発を建設すれば大規模な施設を追って雇用も拡充する、補助金もつく、という形で、いわば自民党利益誘導型政治の変形版が、原発を導入する政策として受け入れを強制していくことになる。

74年、田中内閣の時に、電源三法交付金という原子力発電所を造ると交付金が入るしくみがつくられた。しかも、原発を造ると大量の固定資産税も地元自治体に入る。交付金と固定資産税。一定の自治体では、核燃料税という税金を取れる。それから、東電や東北電力や関西電力は、原発を誘致させるために大量の補助金を出す。もうすでに70年代には、反原発運動の中で、新規立地は難しくなってきた。その中で、いったん導入した浜通り地方とか、青森県とか福井とか、こういうところに次々入れられるようになる。電源三法交付金は7年くらいで激減する。代わって固定資産税が入るようになるが、これも減価していく。しかも交付金などをつくった施設のランニングコストがかかる。それを利用して、第2号炉を造ったらどうですかということ、またそれで食いつなぐ。また財政が入らなくなると、第3号炉を造ったらどうですか、とまた7年。そしてMOX燃料IIブルトニウムの燃料を使えば固定資産税がもつと入りますよ、とまた7年。また7年…という形で、福島だけの場所に10基も造られる。福井県でも十数基。これはフランスとかアメリカとはまったく

違う。

このように、安全性とか、事故が起こった時の危険性とか、まったく無視して狭い地域に集中的に造られていった。だから今回のような大規模な事故になると、もうどうしようもない。第1号炉の隣に第2号炉、第3号炉とあるから、事故が複数箇所、しかも今回の第4号炉の水素爆発は、3号炉から漏れた水素が原因といわれるような複合事故が起こる。たとえばチェルノブイリ、あるいはスリーマイルであれば単独原発だから、そこに対する総力を挙げた収束措置がとられる。しかし、その隣で、さらに隣でも起こっていると、その全体に近づけないということ、原発の収束についても極めて大きなダメージを受ける。

しかも、90年代の構造改革は、この原発建設に対しても非常に大きなインパクトを与えた。大企業の国際的な競争の中で、一方で構造改革による地方、社会保障、雇用のリストラが行われたが、原発政策においても、多国籍大企業は、日本のエネルギーが高価格では勝負にならない、労働力の価格が安くなると同時に、エネルギー価格も安くならなければいけないと電力会社に圧力をかけた。今までは湯水のようにカネを使う原発立地政策を認めていたけれど、そんなことをやっていたら原子力発電のエネルギーコストは上がりすぎる。エネルギーコストが上がるとどうやって削減するかというと、一番いいのは安全基準を上げないこと。安全基準を上げて施設を導入すると必ずコストがかかる。だから「安全神話」だとか言っているけれど、それだけじゃない。安全神話をなぜ認めたのかといえはそれを認めなければコスト競争に勝てないからだ。

大企業のコスト圧力に、東電も政府も従わざるを得ないという形で、安全基準の向上というものを避けていった。これも、原発震災を生んだ大きな原因の一つである。

このように見てくると、東日本大震災においても、原発事故においても、真に復旧復興するには何をしたらいいかということは、きわめてはつきりしている。一つは構造改革の政治をやめること。そして地方の公務員、公務部門、福祉、医療、介護、こういう公的な施設を拡充すると同時に、将来的には地場産業と農業を復活することが不可欠である。利益誘導の政治によつて、大企業に依存して生きながらえていくような地方の現状を改善していかない限り、本当の復旧復興はありえないということが、大きな課題として浮かび上がってきた。また原発の場合は同じように、事故を収束するだけでなく、原発に依存しないでも生きていけるような地方というものをつくらないことには、結局のところ地方自治体は、原発の交付金、東電からの補助金や雇用に頼って生きていかざるを得ないということになってくる。

今回の原発事故で、福島原発の周りの住民たちは非常に大きな危機感を持っている。ところが、玄海にしても伊方にしても、多くの住民は原発再稼働を容認している。地方自治体首長も、この期に及んでも原発再稼働を求めるものもある。なぜ彼らは再稼働に賛成するのか。それでしか自分たちが生きていく方法がないからだ。また、地方自治体はなぜ賛成するのか。それが止められてしまつたら、自分たちにくる交付金や税、補助金なくなってしまうからだ。そういう依存問題を解消しない限り、原発福島を政策的に復旧復興

し、原発のない日本をつくっていくことは非常に難しい。いずれにしても、ここで明らかになったことは、構造改革の政治をやめて、地域を福祉国家型の形で再生するという課題が大きく浮かび上がってきた。

原発以外にも、今年発生した憲法の解釈問題も大きい。「70年間平和だった日本が本当に大好き、集団的自衛権で日本が駄目になってしまおう」の声を無視して、一内閣で憲法解釈を変えてしまおう。

「戦後」は50年でそれ以後は「現代」だ、それのない日本史では世界史への経路が遮断されてしまふ、それが外交的思考を困難にしているというのだ。そして現政権の解釈改憲が「戦争のリアリティーから外れたところで軍事力を過剰に信用する状況の中で行われるのが問題」、そして安保論議が「血を流さない」ロボット戦争にまで劣化しないことを祈りたい。

それと、国連人種差別撤廃委員会は9月29日、日本政府に対して、「ヘイトスピーチ（憎悪表現問題）に「毅然（きぜん）と対処」し、法律で規制するよう勧告する」「最終見解」を公表した。慰安婦問題についても、被害者への調査や謝罪を求めた。「最終見解」は、日本が1995年から加入する人種差別撤廃条約に基づく対日審査の総括に当たり、01年、10年に続き3回目。勧告に法的拘束力はないが、外国人労働者への差別問題など、約30項目で是正を要請した。

東京や大阪を中心に在日韓国・朝鮮人を中傷するデモが最近活発になっていることを受け、同委員会は今回、「ヘイトスピーチ」問題について初

めて勧告した。委員会はまず、ヘイトスピーチについて「デモの際に公然と行われる人種差別などに対して、毅然と対処すること」を求めた。また、ネットなどのメディアやデモを通じてヘイトスピーチが拡散している状況に懸念を表明。「ネットを含めたメディア上でのヘイトスピーチをなくすために適切な措置をとること」などを求めた。ヘイトスピーチにかかわる官僚や政治家への適切な制裁を促した。さらに、「ヘイトスピーチの法規制や、人種差別撤廃法の制定を要請した。等々、上げた枚挙の暇がない位：年寄はもう家の一室で、炬燵に寝転んでTVを見ているのが良いのかなあ……」。

木下 明男

ギター文化館 館長

### 『ふるさと風』100号記念に寄せて

合田洋一

「祝『ふるさと風』100号記念、誠におめでとうございます。私は、石岡市須釜在任の従兄合田寅彦の縁で打田昇三先生にご交誼を賜り、『ふるさと風』及び先生のご著書『ふるさと「風」にたずねて』を愛読させて戴いております。ありがとうございます。」

さて、当記念号に際しまして、「お叱り、ご注文、ご忠告を戴きたい」とのお言葉ですが、このような「仰せ」は中々見つかりません。

それよりも『ふるさと風』代表の白井啓治様を始めとする会員諸氏のご論稿は、石岡市の文化度

の高さを現下に示されております。

私は、以前に従兄が関わっていた『八郷町民文化誌「ゆう」』を通じて、また数度に亘る御地への訪問で、この地のごことは多少なりとも見識しておりましたが、その上『ふるさと風』に触れて、これは偏に常陸国の悠久の歴史・文化が育んだ風土によるものと、なお一層感服致しております。

中でも、打田先生の歴史論稿「風に訪ねて」は、風刺が効いて親しみやすく、常陸国の中世史が手に取るように解ります。また、これに続く「私本・平家物語」も大変面白いです。

それに、他の方も国内外を問わず歴史に関することを論じておりますので、歴史を愛好する者の一人として、貴誌が届くのを毎回楽しみに待ち望んでおります。

実は私も、及ばずながら古田武彦氏（元昭和薬科大学教授）の学説を研究する「古田史学の会」や、愛媛県各地の史談会（「伊予史談会」「松前まさき史談会」「東予史談会」「風早歴史文化研究会」など）に入って歴史の研究をしておりますことから、特に地方史には興味があります。

それというのも、地方史研究において新しい発見があったりしますと、それは言うまでもなく地域文化の発展にもつながり、町おこしなどの社会貢献の一助にもなり得るからです。ましてや、それが後世にも遺るとなれば、歴史研究者にとって大きな醍醐味となるのです。

ところで、当誌には直接関係ないのですが、この場をお借りして「歴史の？」を少し述べさせて戴きます。

通説ともなっているわが国の「古代史」に見られることですが、歴史はとかく「勝者の論理」に

より、勝者に都合の良いように創られ改竄される  
ということであり、それは現・天皇家が神代から  
日本列島の主権者で近畿地方に君臨していたとい  
う、『古事記』や『日本書紀』に基づく「近畿中心  
主義」の所謂「万世一系・近畿王朝一元史観」に  
他なりません。

現にわが国の各地での考古学上の発掘・発見が  
あると、これらは殆ど全てにおいて、と言っても  
良いくらい大和王権（近畿天皇家・後の近畿王朝）に結  
びつけて、大和の影響下にあった、または大和か  
らこの地にもたらしたものと発表がなされます。  
一方それに対するものとして、古田武彦氏の「多  
元史観」があります。

これは中国や朝鮮半島の史書、或いはわが国の  
考古学上の遺跡や遺物に基づき、古代においては  
各地に王国があり（例えば『稻荷山古墳・鉄剣銘』の考察な  
どから群馬・栃木・埼玉・茨城地方一帯にあった関東王朝なども  
一ふるた武彦著『関東に大王あり』〈新泉社〉・『古代は輝いていた  
』）（ミネルヴァ書房）を参照されたし）、日本列島の宗主  
国としては、近畿王朝に先立って「出雲王朝」次  
いで「九州王朝・倭国」があったというものです  
（大宝元年七〇一〜三月二十日まで。以後、近畿王朝は文武天皇  
に始まる）。

これら大きな違いのある歴史観の一体どちらに  
「真実」があるのでしょうか。

ところで「記録文明の国」とも言われている  
「古代中国」の史書の編纂については、王朝が替  
わるたびに各王朝は前王朝からの「政權篡奪」の  
行為を正当化するため、「虚偽」を記載すること  
は往々にしてありますが、こと外国に関してはむ  
しろ正確な記述をしていたと考えるべきなのです。  
中国歴代王朝にとって、外国の実情を正確に記

録することは当然のことです。

何故ならば、一旦ことある時、戦略上対処する  
ためには、その国の実情を正確に知っておかなけ  
ればならないからです。

しかも、中国は名にし負う「中華思想」の国で  
あり、世界の中心との位置づけから、周囲の国は  
全て蛮族扱い「南蛮・北狄・東夷・西戎」の「四  
夷思想」なので、それらの国のことについてはこ  
とさら「虚偽」を書く必然性もなかったのです。  
従って、中国史書のわが国に関しての記録につ  
いては、わが国の「勝者の歴史書」よりも、おほ  
かたは信憑性が認められるのです。

そうなると、中国史書の記述は、前述の「万世  
一系・近畿王朝一元史観」を貫くために、近畿天  
皇家が日本列島の宗主国となった大宝元年（七〇一）  
以前に、「九州北部に王朝が存在した」「証し」が  
記されていたならば、大きな障害となり極めて困  
ることになるのです。

その例として、『隋書』「倭国伝（たいこくでん）」  
には、わが国のことはどのように記されていたの  
でしょうか。

「倭書には隋の使者・裴世清が、先の（大倭  
（たいわ）国・倭国）の使者（六〇〇年）の答礼としてや  
つて来て、その行路・政治状況を克明に記してい  
ました。その中でほんの少しですが概略を示しま  
すと次のようです。

倭国は百済・新羅の東南に在り。水陸三千里。  
大海の中に於て山島に依りて居す。倭王、姓は阿  
每（あま）、字（あざな）は多利思北孤（たりにしほこ）。王  
の妻、鷄弥（きみ）と号す。太子を名づけて利と為  
す。歌弥多弗（かみたふ）の利なり。阿蘇山有り。

其の石、故無くして火起り天に接する者、俗以て  
異と為し、因つて禱祭を行う。大業三年（六〇七）、  
其の王多利思北孤、使を遣わして朝貢す。其の国  
書に曰く「日出ずる処の天子、書を日没する処の  
天子に致す。恙無し（つつがなし）や云云」。

これを解説しますと、「水陸三千里」は、『三国  
志』「魏志倭人伝」に記されていた、狗邪韓  
国（朝鮮半島南部にあった倭人の国）↓対海国（対馬）  
↓一大国（支国・壹岐）↓未盧国（松浦）間が各  
一千里、合計で三千里を指しています（魏の時  
代は短里で一里は約七十七メートル）。

「大海の中の山島」は、「魏志倭人伝」の記述で  
も示された通り、まさしく九州島のことを言っ  
ています。

倭国の王の名は阿每多利思北孤、王の妻は鷄弥、  
皇太子は歌弥多弗の利（上塔<sup>△</sup>かみたふ<sup>△</sup>の利、博  
多の字地名<sup>△</sup>旧・九州大学の地帯<sup>△</sup>にある「上塔（か  
みとつ）」「下塔（しもとつ）」と関連する在所名であり、  
そして「利」は中国風一字名称と思われます）、と  
あります。

そこで、この通説はどうなっているかと申しま  
すと、これらの名前は『古事記』や『日本書紀』  
は言うに及ばず、日本側の文献には一切登場しな  
いにも関わらず、多利思北孤を推古天皇やその皇  
太子厩戸皇子、或いは蘇我馬子に比定しています。  
驚くなかれ、妻がいる男性の多利思北孤を女性の  
推古天皇に比定するというのは荒唐無稽であり言  
語道断です。また、厩戸皇子や蘇我馬子は言うま  
でもなく国主ではないので、全く該当しません。  
従って、『隋書』記載の人物は、全て近畿天皇家の  
人物ではなかったこと明白です。

そして、多利思北孤には阿毎（天族・海士族の天（あま））という姓があるのに対して、近畿天皇家には姓はありません。このことだけでも、多利思北孤を近畿天皇家の一員に比定することは間違いないのです。

また、王の住む宮殿の近くに当時噴火していて、その状況が描写されている「阿蘇山」があると記しています。阿蘇山は言うまでもなく、近畿にあらず九州北部です。倭国は正に「阿蘇山下の王朝」だったのです。

次に、「日出ずる処の天子……」の文言で綴られていた国書は、中国大陸の各王朝に対する朝貢国であった以前の倭国とは違って、多利思北孤は中国と対等の独立国としての体裁を示し、その尊厳を見事なまでに格調高く表現していました。

ところが、この「天子の文言」が大変な問題になったのです。中国からすれば、世界中で天子は中国の王朝に只一人でなければならず、「二人天子」など絶対に認められないことなのです。

その為、隋は倭国（倭国）と「国交断絶」をしたのですが、倭国に対してそれ以上の「制裁」を加えなかつたので、これが隋の命取りにつながり、三七年間の短い王朝になったのです。

と言いますのは、唐を建国した李淵（隋の將軍で後の初代皇帝）が、この「天子の文言」に対する処分の仕方を大義名分として隋にクーデターを起こしたようであり、このことはことほど然様に重要なことだったのです。

これが、九州王朝・倭国が後に唐と新羅の連合軍に惨敗した「白村江の戦い」（六六二年―古田説）の引きがねとなり、倭国滅亡の遠因ともなったのです。

この「日出ずる処の天子」の国書が、不思議なことに国史とされる『日本書紀』には一切記されていないのです。

つまるところ、この国書は近畿天皇家のものではなかつたからです。また、近畿天皇家は唐の支援があつて、九州王朝から「政權篡奪」を成し得たと考えられることから、唐朝に配慮して『日本書紀』には「盗用」してまで記録することができなかったのです。

ところで、日本人なら誰もが知っていて、わが国古代の最大の英雄・聖人とされた聖徳太子（厩戸皇子）ですが、奈良時代に入つて時の政權により九州王朝の天子・多利思北孤を、近畿天皇家の厩戸皇子に「換骨奪胎」した産物なのです。正に、聖徳太子は「創られた虚像」でした（拙書『聖徳太子の虚像』『新説 伊予の古代』を参照願いたし）。

次に、『旧唐書（くとうじよ）』を見てみます。これには「倭国伝（わ（あ）こく）」と「日本国伝」の二つの王朝を別国として記録しております。その概略は次のようです。

「倭国伝」には、

倭国は古の倭奴（あじ）国なり。京師を去ること、一万四千里。新羅の東南の大海の中に在り。山島に依りて居す。東西は五月行、南北は三月行。世に中国と通ず。其の国、居するに城郭無し。木を以て柵を為し、草を以て屋を為す。四面に小島、五十余国、皆（みな）焉（こ）れに付属す。其の王、姓は阿毎（あま）氏。一大率を置きて諸国を檢察し、皆之に畏附す。官を設くること、十二等有り。（後略）

とあり、また「日本国伝」には、

日本国は倭国の別種なり。其の国日辺に在るを以て、故に日本を以て名と為す。或いは曰（い）う、倭国自ら其の名の雅ならざるを悪（にく）み改めて日本と為す。或いは曰う、日本は旧小国、倭国の地を併（あ）わす。其の人、入朝する者、自ら衿大（きょうだい）にして実を以て対せざる、多し。故に中国焉（こ）れを疑う。

とあります。

これを見ると、「倭国伝」は、志賀島の金印「漢委奴国王（かんのいどこくおう）」（漢の倭の奴の国王）ではないの「委奴国」から連続と続く、九州島内にあつた国、所謂九州王朝・倭国のことを言っています。

それに対して「日本国伝」は、日本国は倭国の別種であり、日辺にあるので日本を名乗る。或いは、倭国がその名は雅でないの日本と改めた。それを旧小国（近畿王朝）の日本が倭国（九州王朝）の地を併せた。入朝する者（遣唐使ら）は尊大で、彼らの言っていることと今までの倭国との国交の事実とは違うので、中国はこれを不審に思っている、と記しているのです。

これで明らかのように、この『旧唐書』は二つの王朝と、そしてその統合の状況を見事なまでに明確に表記しております。なお、ここに挙げた二つの書の他にも次のもの



があります。

『後漢書』「倭伝」にも記されていた前述の「志賀島の金印―漢委奴国王」の「委奴国」の比定地は、博多湾岸・前原市近辺。

『三国志』「魏志倭人伝」で有名な女王・卑弥呼ひみかの「邪馬壹国」（邪馬台国ではない）の比定地は、博多湾岸一帯。

『宋書』「倭国伝」に記されていた「倭の五王」の倭国の比定地は、太宰府を中心とした博多湾岸。これらについては詳述しませんが、「近畿王朝―元史観」に立つ歴史学者やマスコミは、このように中国の史書で都合の悪いところは無視し或いは重要視せず、天皇家の礎を築いた大和の地へ、何が何でももつて行こうとしますが、事実は大きく違っていたのです。

そこで、これらの書を先入観なしに素直に読み解けば、わが国古代史の実体、あまつさえ「九州王朝」の存在が誰の目にも解るはずです。

私は、このような“歴史の？”を問題としている古田武彦氏の「多元史観・九州王朝説」に則り、微力ながら“真実の歴史”を後世に伝え遺したいとの想いから、わが国の古代史を研究しております。

「時のうつろい」に亡びぬ真実こそが、万世最大のロマンなのではないでしょうか。

お祝いに便乗して、厚かましくも縷々申し上げました。お許し下さい。

最後になりましたが、打田先生のなお一層のご活躍と『ふるさと“風”』の益々のご発展を、遠く四国の地から応援してゆきたいと願っております。

恐々謹言

合田洋一（愛媛県松山市在住）

古田史学の会全国世話人

主な著作「伊予之・名洲考」「聖徳太子の虚像」「新説伊予の古代」他

### 日立市多賀山地は日本のふるさと 野口喜広

今年の6月22日、日立武道館（旧 共楽館）で、『土笛が奏でるく日立5億年大地の調べ』と題し、私の土笛（オカリナ）コンサートが催されました。

「日立5億年」の意味とは、日立市から常陸太田市にかけての多賀山地にはカンブリア紀（5億4千万年〜4億9千万年前）の日本最古の地層があるという事です。カンブリア紀という時代は地質時代、古生代前期、地球上の大半が海に覆われ、海洋生物が多数出現（カンブリア爆発）したそうです。代表的な生物は、節足動物の三葉虫やアノマロカリスなどです。

また、「大地の調べ」とは、日立市小木津山（おぎつやま）自然公園山頂の5億年前の火山灰と田尻浜の粘土と日立鉾山のカラミ（鉾山のカゴを混ぜ込んだ）、大地のロマン入り土笛（オカリナ）の事です。そして、土笛のモチーフになった形はアノマロカリスです。

私は、土笛（オカリナ）奏者のライフワークとして、日本各地の謂われのある地層の粘土で土笛を制作し、その土地に伝わる物語を曲や詞にしてみました。日立市で日本一古い地層に出会い、その

土で土笛（オカリナ）を制作し、その土地でコンサートができることの喜びは、私にとってこの上ない幸せです。

また、今回の演奏の大きな目的は、特にこの事実を日立市民の方々に知ってもらい、そのことに誇りと感謝を持ってもらいたいと思ったからです。日立鉾山の銅鉾石は5億年前のもので、その当時ゴンドワナ大陸の淵、中国北東部の大陸棚で、火山島として地下のマントルから噴き上がったものです。日立鉾山は日本四大銅山のひとつとして日立のみならず、日本の産業発展の礎となりました。

また、その鉾山の機械修理工場から、大正時代に今の日立製作所が生まれました。この大地の恵みこそが日立市発展の陰にあったのです。その他、先人達が評価して大切にしてきた5億年前の地層をいくつか紹介します。

東連津（とうれんづ）川の不動滝には不動尊が祀られ、その川にはオマンダラ様という岩壁に文字で刻まれた石仏があります。宮田川にある座禪石（ざぜんし）は、大雄院を開いた南極寿星が修業した5億年前の巨岩です。「常陸国風土記」に登場する御岩山には御岩神社があります。神峰神社のあるかみね公園も5億年前の地層の上にあります。「日本書紀」に出てくる大甕（おおみか）神社の宿魂石も5億年前のもので、神代の国造り伝説があります。昔の人々は自然に畏敬を抱き、石に魂を感じていたのだと思います。

このように、日立は古くから大地の恵みの恩恵を受けてきました。これから先も、この地の利を生かし、日立の未来に役立てて行くべきだと思います。

実は、2011年茨城県北ジオパークの一つ、

日立市に分布する日本最古の地層を含む地域も、「日本ジオパーク」として認定されました。ジオパークの意味は、日本語にすると「大地の公園」になります。ユネスコにおいて世界遺産の保護活動の一部と認定されています。ジオパークの定義とは、地質・地形などを主な見所とする「大地の公園」で、目的は、科学的に貴重かつ美しい自然遺産を保全すると共に、歴史的・文化的なものも含めて、それらを観光資源として地域の活性化、科学教育に活用すること、自然災害を学ぶ場所でもあります。

以上の目的を実現するために、公共団体・地域社会ならびに民間による共同行動計画を作り、ジオパークを運営することが求められています。地域社会の自主的な取り組みがジオパーク活動の中心になります。そして活動の中で、ジオパークツアーや地域の特産品による新たな収入の道を開くことも求められています。そのため、ジオパーク認定5年後に再審が行われ、ジオパークの活動が評価されます。評価まであと2年余り期限がせまっています。しかし、市民のジオパークへの認知度は低く、ふるさとの価値をもっと知ってほしいと願っています。

仏教用語に「身土不二（しんどふじ）」という言葉があります。「身」（今までの行為の結果＝正報）と「土」（身がよりどころにしている環境＝依報）は切り離せないという意味です。また、「身土不二」食養運動のスローガンで、「地元の旬の食品や伝統食が身体に良い」という考えがあります。身体は食べたものから作られ、食べ物から作られる。よって身体と土は不可分のものであるということです。

私は、今回のコンサートで、地元日立の5億

年前（カンブリア紀）の土製の土笛（オカリナ）を奏で、その音色が日立市民の心に共鳴し、ふるさとの価値を感じ、日本のふるさとでもある日立の大地をこれからも大切に生かして行ってほしいと願い、心をこめて演奏いたしました。オリジナル曲「カンブリアの海く夢」いかがだったでしょうか？

野口喜広

オカリナ奏者

オカリナアートJOY代表

### おぼんのアメリカ旅行

田島早苗

脳は未だ解明されない部分の多い謎だらけの小宇宙だと言われている。昔人間の私には想像すら出来ないおぞましい事件が多発する現在、ニュースを見るのが怖くなるほどだ。

育児放棄、幼児虐待、無差別殺人等々が頻発する社会現象の原因の中には、深層心理の海底に閉じ込めていた筈の、子供時代の虐待で出来たトラウマが、何らかの刺激で表に現れた結果、犯行に及んでしまうケースが多いという。無意識のうちにトラウマに操られる人生の怖さ：被害者も加害者もその後の人生を閉ざされてしまうのだから。

日本の行く末を案じ、「子育ての大切さを、もっと認識し直して！」と人生の終末に近づいた婆でさえ叫びたくなってしまう。

ところで、私の脳細胞は、今までの人生で出会った衝撃的な出来事の数々は、鮮明に覚えているのに、日常茶飯事のすべては見事に忘れてしまったようだ。きっと小さな出来事は、錆びついた記

憶の引き出しに仕舞い込んだまま開けられなくなっているのだろう。しかも加齢とともに、その数もどんどん増え続けている。脳が全く機能しなくなる前に、せめて覚えていく体験だけでも残したいと、アメリカ旅行記に取り組み始めた。細事を記録したはずの手帳も行方不明で、完全とは言えない旅行記になりそうだけど、しばらくお付き合い頂きたい。

それは、昭和から平成へ、世紀のバトンタッチが行われた年の五月の事だった、突然アメリカミシガン州立大学に在学中の息子から電話がかかってきた。入学以来三年間、お金に困った時以外はほとんど使ってもなく、身を削る思いで送金しても梨の礫だった我が子の、懐かしい声が耳に飛び込んできた途端、何か悪いことがおきたのでは？と思ってしまったが、これには深い訳がある。

以前京都のクリスチャン系私立大学に入学した息子は、同和問題を抱える土地柄にすっかり嵌まり込んでしまい、夏休みも冬休みも返上して特殊部落の不遇な子供たちの勉強のお手伝いをしていたらしく、休みになっても帰ってこなかった。大切な息子を京都に送り出したまま、一度も下宿先を覗かなかつたいい加減な母親に大きなしっぺ返しが来たのは、二年生になった息子からの一本の電話だった。

「お母さん今度、難民の溢れている国境へボランティアに行くことにしたから、家に置いてきたオートバイを送って！」寝耳に水だった私には息子の話の意味がよく分からず、混乱する頭で『今まで、旅館のアルバイトをして貯めたお金に、オートバイを売ったお金を足して、自費で難民救済支援のため、国境へボランティア活動に行く』と

言う途方もない話を理解するのは容易な事ではなかった。

しかし物は考えよう、もし息子が将来『若い時にやりたいと思ったことを親の反対で我慢してしまった』と後悔をするよりは、同じ後悔でも自分で選んだ結果なら納得できるのではないかと思ひ、これは自立心を育てたいと頑張ってきた育児法が実を結び、私へのご褒美が出たのだと、無理やり自分に言い聞かせ、休学は一年間との言葉に縋りついていていけない母親だった。こうして入学以来一度も帰郷しないまま息子は独り異郷に飛び込んでいった。

以来、外国のボランティア団体で働いているとの便りが一度あつたきりで状況も見えず、唯ヤキモキするばかりの日々が続いていた。そんな時近所の友人から、「今日のニュースでタイのバンコクで拳銃発砲事件があつて三人の日本人ボランティアが狙われ、真ん中の一人に当たつたらしいけれど息子さんは大丈夫？」と電話が入つた。

後から聞いた所によると同じように国境でボランティアをしていた先輩たちと、国際ボランティア活動の拠点として『日本ボランティアセンター』を立ち上げ、動き始めたばかりだったとか。その日は三人でバンコクへ夕食を食べに出かけ、拳銃強盗に遭遇したという。若い息子が尊敬し頼りにしていた先輩が、すぐ隣に凶弾に倒れ命を落とす、というショッキングな出来事は、息子の人生を百八十度変えてしまった。

「救急車を手配して病院までの間、付き添つた僕の手を『後を頼む』というようにしっかりと握つていた先輩の遺志を継がなければ！」一途に思ひ込んだ息子は、先輩の葬儀のために帰国したそ

の足で京都の大学に退学届けを出し、そのまま再びタイへ飛び立っていった。

退学届のことも息子からは何の相談も受けず、学校から「ご息子が退学届けを出されましたが親御さんはご承知でしょうか。新しく入り直すのも大変です、学費だけ払っていただければ休学と言う方法もあります」と電話を頂き又もやおろおろするばかり、結局復学する日の来るのを願ひながら納めた二年分の学費は無駄になった。

使命感の虜になつた息子は、親の心配を他所に『日本ボランティアセンター』の代表代理として頑張ること五年、ようやく会としての目的が立つたのを機に、地球環境学を学ぶため、ミシガン州立大学に入り直していた。きつと多くの人々に関わり始めて、学業を中断したのを後悔したのである。

「母さん！卒業式にミシガンにこない？」私の杞憂ははずれ、息子の久し振りの電話は、自分の卒業式への招待だった。電話口で即座に「行く行く！」と叫んでいた私は、英語も話せず、外国旅行も初めて、高所恐怖症のため飛行機に乗つたこととさえ一度もなかつた。思い立つたら後先のことばかりは考えず突つ走る息子の性は、若しかして母親譲りかも。

当時、戦中派の真面目人間だった私は、若い人の多い職場の中で孤立、言いたいことを我慢する日々も限界に達していた。いつ退職してもいいと覚悟を決めたら怖いものなし、無理やり二週間の休暇を頂き、初めての外国一人旅に出発した。

方向音痴、地理音痴の母を心配した息子の嫁から（なんと嫁さんも、親に断りもなく、日本のボランティア仲間の女性と現地で婚姻届けを出し、共にミシガン州立大学で学んで

いた往復切符と一緒に、成田空港の出発手続きと、デトロイト空港へ行く乗換のこと、到着ロビーでの心得、入国手続きなどを事細かく記した手紙が届いた。デトロイト空港では出迎えの人は中へ入れないので、入国審査手続きは、すべて一人ですることになるからと、万一のことを憂ひ、ごたごたした時は先方に見せるようにとの手紙も同封されていた。

『現金はあまり持たず、旅行用の金券に変えてくること。旅行者然とした派手な衣裳の人は狙われ易いからラフな格好で来る方が良い』という忠告に従つて、スニーカーにジーパン姿の私は、こみ上げる不安を押し殺し、いかにも旅慣れた顔をして搭乗手続きの列に並んでいた。見送りの夫はそんな妻が心配でたまらず、同じ飛行機に乗ると言う中年の男性に、妻が初めての海外旅行で、飛行機にも乗つたことがないからよろしくとしきりに頼んでいた。

カナダのトロントへ仕事で行くと言うその男性と隣り合わせに座ることが出来、自動車メーカーの仕事で度々出かけているトロントの話聞かせて頂き、飛行機の中で行う手続きも手とり足とり教わり、乗り換えも問題なくクリアー、何の不安もない旅の始まりだった。

ローブウエーに乗れば外を見られず、吊り橋も渡れないという、極め付きの高所恐怖症だった私でも、腹を据えてしまえば飛行機の窓から下界を見下ろすことも出来ることを発見して、一人前の旅行者になつたつもりだった。

ところが、デトロイト空港に到着した時は文字通りの一人ぼっちだった。荷物を受け取り、さて、どこへ並べばよいのかとキョロキョロしていた私

の姿が余程目立ったのだろう、スタイル満点の黒人女性警官が近づいてきた。腰に拳銃を吊るし、まるで西部劇の一場面のように「カモン」と言う仕種で指を動かしている。仕方なく「私？」と自分の顔を指させば、うなずき乍らさらに誘導してゆく。

一室に連れ込まれた私のボディ検査を入念に行かない、ウエストバックの中身を調べた挙句「ハウマツチハブマネー」らしきことを言う。質問の意味は理解したがしどろもどろの私の答えは日本語と英語が入り混じって理解できなかったかもしれない。今度は旅行ケースを指さして「オーブン」と言う。一応嫁の手紙を見せたが読みもしないで無視。これではまるで麻薬の運び屋扱いだと思いつつ、つらつらわが姿を見れば、いかにも旅慣れた姿の一人旅、所持金も少なく、しかも取引相手を探すようにキョロキョロしていたとなれば疑われても仕方ないか、と諦めが先に立ってしまい、思い切つて旅行ケースを開ける。

着替えの衣装の隙間と言う隙間には、目一杯お菓子詰め込まれ、いくら探しても不審な品物は見当たらない、さすがの女性警官も見込み違いを悟つたらしく、途中でもういいという身振りをするが、謝罪の一言もなかった。

一応解放されたらしいが、日本で時間をかけて工夫しながら目いっぱい詰め込んだ中身を、監視されながら元に戻すのは至難の業だった。冷や汗三斗の思いでようやく詰め終わり、入国手続きを済ましたのは恐らく乗客のどん尻に近かったことだろう。

待ち人の中に息子たちの姿を見付けた時の嬉しさ、思わず涙が出かかったが、それ以上に待つて

いた二人の心配は尋常ではなかったらしい。

初夏の日本を出発して来たのにミシガンにはまだ雪が残っていた。周囲の自然を鑑賞する時間もなく、簡単な挨拶を交わして乗り込んだ車の中で、矢継ぎ早に浴びせられる質問、初体験の出来事に興奮ぎみの私が身振り手振りもよろしく語り、すっかり盛り上がった車内では、嫁と初対面と言う緊張も、ぎこちなさも、すっかり消えていた。

さて卒業式当日、私は日本から運んできた和服一式を身に纏い、日本の卒業式との大きな違いに戸惑いながら騒々しい大会場の一角に身を縮めて座っていた。言葉の通じない私の通訳よろしく、脇で色々気配りして呉れている嫁の存在が唯一の救いだった。

規律正しい日本の卒業式とは全く違うフランクな雰囲気の中で開始された卒業式。学長の挨拶が始まり、耳元で一所懸命通訳してくれる嫁の言葉が耳を素通りしていく。

式次第も終わりに近くなり、在学中に良い成績を修めた卒業生の表彰と奨学金授与の発表があり、思いがけなく息子の名前も読み上げられた。更に「卒業式に参列するため、はるばる日本から母親が会場に来ています」との紹介があった。今度ばかりは実に嬉しい不意打ちだった。嫁に促されて立ち上がった私はさぞかし真っ赤な顔をしていただろう。

今まで日本人が卒業式に参加したのは一度も無かったとか、大変な思いをして和服を持って来た甲斐があったと、密かに胸を撫で下ろし乍ら、数多の視線に曝され、ちよっぴりスター気取りで深々と頭を下げていた。まことに単細胞の私。

その後行われた卒業記念のパーティーでは、お

世話になった多くの先生方に紹介され、次から次へと握手を交わしながら、すっかりリラックスして周囲を観察し始める余裕も生まれていた。

アメリカは色んな人種の坩堝とか、パーティーの会場に集まった多種多様の人々が談笑を重ねている様を見ながら、一留学生に奨学金を授けること等々「さすがにアメリカの懐は深い」と、デトロイト空港のハブニングも忘れ、今やアメリカ鼻根に成りそうな単純な私だった。

さて、卒業行事も一段落したので、かねてからの計画通り、ミシガンからワシントンまでのアメリカ大陸縦断旅行に出かける事になり、二人に任せでのんびり、ワクワクしながら車に乗り込んだ。その行く手に、とんでもないアクシデントが待ち受けているとは、神ならぬ身の知る由もなく。都市部を離れると流石に外国は広いと実感。広大な平原を貫く高速道が延々と続くが、予算が不足で道路の修理が間に合わないのだとか、日本の常識では考えられないおんぼろ高速道だった。

昔から『一見は百聞に如かず』と言われているが、ほんに観光旅行の醍醐味は、写真で見ているものと全く別の実物に出会えることに尽きる。ナイアガラの滝を実際に見た時もその感動を表す言葉は見つけられなかった。

観瀑船に乗る勇氣も出ないまま、巨大な滝壺からの飛沫を浴び、引き込まれそうな怖さをこらえながら、黄色いレインコート姿の人を満載した観瀑船が、大きな虹の輪を潜るのを見下ろしていた。滝は見上げるものと言う私の中の常識は見事に破られてしまった。

虹の輪にゆるりと入る観瀑船

早苗

ところで、すぐお隣の国なのに、カナダでは、フランス語が母国語として使われているという。外国の先進国ではほとんど英語が使われていると思っていた私の常識は又もや覆されようとしていた。

地理音痴の私には息子の、カナダとアメリカの国境の話はチンプンカンプンだったが、「トロント」と言う地名にすぐ反応、無理を言って工業都市として栄え、各国の企業が進出しているというトロントに、予定外の寄り道をするようになった。

先ず世界一だという中華街を見物する事になり、駐車場探しから始まったが、何処も満車だった。ようやく広い道路の端の駐車場らしき所に一台分の空きを見つけ、待望の中華街見物が始まったのは、十一時は過ぎていただろう。

流石世界一だと言われる中華街、その広さは半端じゃなかった。中華饅頭を食べながら歩くこと一時間余り、疲れ果てて戻った駐車場には何と車が一台もなかった。

方々に問合せ、その場所は午後から駐車禁止になるという事や、車は駐車違反として牽引されたことが分かった。よく見れば、『午後からは駐車禁止』の小さな表示板が、日本人の背丈では見落としてしまうのも仕方がないかと思える程上の方に下げられていた。

牽引された車置き場までの道は遠かった。でも車の行方を突き止めた息子の成長ぶりを目の当たりにした嬉しさと、その上あちこちで行われている路上ライブやパフォーマンスも見られて『これが欧米なのだ』とすっかりご満悦だった私とは裏腹に、二人の苛立ちには相当なものだったらしい。

やっと辿り着いた違反車置き場の広がったことには驚いたが、管理事務所で手続きを待つ人の列を見てその違反者の多さにも驚きを禁じ得なかった。ようやく自分たちの番が来て、年配の係員に「自分たちは旅行者で、午後から駐車禁止のことでも知らず、表示も目に留まらなかった」と一生懸命説明する息子、その言葉をまるつきり無視して、係員は罰金を払えと言う。「あんなに小さな表示板を目線より上に下げて、初めての人は気が付かないのが当たり前でしょう」と思わず叫んでしまった私の言葉を通訳しながら、「と母が申しています」と苦笑する息子。傍で、「お母さん、もつと言つて！」とけしかける嫁、何を言っても『蛙の面に何とやら』罰金を払えと繰り返すばかりの係員。結局罰金の高額なのに目を剥きながらしどろしどろ羽目になり、ようやく自分の車を戻してもらうことが出来た。

時間の遅れを取り戻すように早々と高速道に乗った私たちは、しばらく無言だった。そのうち何かきな臭いにおいがして、後ろから煙が上がっているのが見えた。路肩に車を寄せて調べると、エンジンオイルが漏れて煙が上がり、引火寸前の状態だった。もう少し遅れていたら、三人は火だるまになって命を落とすところだったのだ。

見渡す限り何もない平原の高速道で途方にくれていると、パトカーがやってきた。その早い対応も日本には無いものだと思ひ感じ入っている私。幸い保険に入っていたので、すぐに連絡が取れ、間もなくレッカー車が到着、三人が便乗させてもらったパトカーを先導に、修理屋さんまで一直線。気のよさそうな修理屋の小父さんは、車を入念に調べ、エンジンが焼けてしまつて手の施しよう

も無いという。オイルとエンジンを繋ぐ管がゴムホースに取り換えられていて、傷ついたゴム管から大量にオイルが漏れ、事故につながったのだという。きっと違反車として牽引された時ゴム管に引つ掛られ、傷が付いたのだろうと思われるが、簡単に修理できると考えていた私たちは落胆のあまり言葉も出ない。

アメリカで中古車を買う時には、よほど気を付けないと、とんでもないものを掴まされる危険があるのだという。「車を買う時よく調べたつもりだったが、オイル管までは気が回らなかった。若しかしたら修理に出したときに取り換えられたのかも」と悔しがる息子に何と言葉を掛けたら良いか見当もつかなかった。

廃車手続きはカナダでは出来ず、自分の住んでいる国まで車を移動させねばならないという、取り敢えず料金を払って車を預かってもらい、レンタカーを借りて旅行を続ける事になった。何事も金さえ出せばすぐに解決するのが欧米らしいが、ミンガンの日本人学校でアルバイトの臨時講師をしながら学業を続けている二人にとって、この臨時出費は手痛いものに違いない。

所持金の少ない私にも、助ける手立てが無く、息子のオンボロ車よりはるかに乗り心地の良いレンタカーに揺られながら「私がトロントへ行くと言ったばかりに」としばらくは落ち込みから立ち直れなかった。

私の乏しい記憶力の中には、アクシデント続きの事柄ばかりがでんと居座り、途中で泊まったホテルや、あまり美味しいとは思わなかった食事のこと等詳細が思い出せない。確かにアメリカの食事は大雑把で、ケーキもやたらに甘かった。で

も、若いも若きも楽しそうにぱく付いていたハンバーグやフライドチキン、由緒のありそうな食堂で出された草鞋みたいなビーフステーキの厚さ等に驚いたことだけは覚えている。

ニューヨークの大学で学んでいる息子の友人へ土産にするドリアを買ったのはどこの市場だったのだろうか、食べると美味いというドリアの臭いが車内に充満、閉口したことは強烈な印象として残っている。ニューヨークの街は思ったよりも雑然としていると言うのが第一印象だった。でも、自由闊達な大学の中で、意外に真剣に学んでいる学生の姿に感銘を覚えたのが忘れられない。

その後全く記憶に残っていないが、恐らく、途中のモーターで泊まりを重ねながら？多くの州を素通りしてひたすら急ぎ、日本から送られたというポトマック川の辺の見事な桜並木を見ることが出来た。残念ながら葉桜になっていたが、これからはるばる日本からやって来て、こんなにも見事に育つたのだと思うと感慨も一入だった。

最後の訪問地アメリカの首都ワシントンは、流石に見応えがあった。色とりどりの国旗をはためかせた外国の立派な大使館がずらりと並び、各国それぞれの威容を誇っている。リンカーンの像が入口にでんと据えられた立派な記念堂。それに比べ、国際ニュースでお馴染みのホワイトハウスは広い敷地内の中で意外に小さく見えた。

日本の新聞社からワシントンに企業留学している友人の家に泊めて頂き、次の日は奥様の案内で色々見て回る。中で一番印象に残ったのは、スミソニアン博物館の立派な事と、膨大な展示作品しかも、それが無料で見学出来る素晴らしさだった。人を育てるのに力を入れているアメリカの見

事な一面がそこにあった。

日本の中で縮こまっていた私の精神がすっかり解放されていたアメリカの旅。盲目の人が像の足を撫で、鼻を撫で分かったつもりになっているだけかも知れない、抜け落ちだらけの旅行記は、哀れなポンコツ車の始末記で終わりたいと思う。

後から聞いた所によると、修理屋に預かってもらった車は毎日に料金が嵩んでゆくので、仕方なくミシガンまで送り返してもらい廃車手続きを行った。その輸送代金の高かったこと。その上アメリカの縦断に使ったレンタカーの使用料金、日常の必需品として欠かせない車の買い替えに要したお金、まるで湯水のように出金が嵩んだことだろう。

母の気紛れで立ち寄ったトロントの為に、とんだトバッチリを受け、大変な思いをした息子夫婦は、愚痴も泣き言も一切言わず、帰国する母を機嫌よく送り出してくれた。

帰国後少々送金した母のヘソクリが少しでも役立つことを願いつつ、後悔から抜け切れずにいる私だった。

(わずか六ヘージ足らずの旅行記の中に、多くの思い違いがあったことが読み返して判明し、慌てて修正した。

ほぼ二十五年前の出来事さえ正確には思い出せず、自分の都合のいいように思い込んでしまった脳細胞の怖さ。

今隣国間で歴史認識の違いからくる対立がエスカレートしているが、自国の主張に固執する限り、解決は見いだせないのでは？…と気がもめる日々が続いている。

田島早苗 稲敷郡美浦村在住

陸平をヨイシヨする会会員

著書「霞ヶ浦のほとり」

## 水ガキからの手紙

Ⅱ百号の偉業に敬意を込めてⅡ 今泉 文彦

キャラッ！ キャラッ！

目の前を、大きなヤマセミが鳴きながら横切った。左岸の藪から右手の森の中へ、黒い羽音は源流の水音を一瞬かき消しながら去っていった。

―秋田県雄勝町の山間を流れる役内川の上流部。奥羽山脈の最南端に位置する神室山地を水源とするこの川は、日本の川の原風景を色濃く残すノスタルジックな流れだった。

ヤマセミの突然の出現に、私は仰天し、不覚にも溪流竿を上下に震わせてしまった。初夏の日差しを浴びて澄んだ流れの中に立ち、水と光と風と緑のシンフォニーにどっふりと浸かっていると、ろを、突然爆竹に襲われたような気分だった。

三十メートルほど離れた上流には、釣り仲間のM氏が何も知らないで真剣に釣り糸の目印を見つけている。下流で釣る師匠のA氏も同様に、魚信を探っている。

良い川だ、実にすばらしい川だ。すでに尺イワナを数匹釣り上げた私は、圧倒的な魚影に感動しながら、ヤマセミの消えた森の方角に眼を凝らした。

数分後に当たりがあって、三十センチ弱の太っ

たイワナが掛かった。ゆつくりと魚を手元に引き寄せ、ハリを外して脳天に小石のチョップをくらわせる。ピクピクと二、三度身体を痙攣させて動かなくなったイワナを流れに浸けて、ナイフで肛門からノド元までを一気に切り開く。

一筋の血が辺りを染めて流れた。腹に指を入れて内臓を引っ張り出し、赤黒いエラと一緒に魚体から取り外した。パンパンに膨れ上がった胃袋の中央に、ナイフで切れ目を入れると、中から川虫や甲虫の死骸があふれ出てきた。

豊かな川だぞ、と私は舌なめずりをした。割いたイワナを水で洗い、内側の背骨の部分の血あいを爪でこそぎ落とし、十分に水を切ってからピクに入れた。お前にとつては、残酷な扱いかもしれないけど、おいしく食べてあげるから、恨むでないヨ。と私はイワナに言い聞かせた。

流れで手を洗い、再び釣り始めた。M氏はどうだろうと思ひ、上流に目をやると、彼はちやうどイワナと格闘しているところだった。十秒ほどで尺イワナを釣り上げ、誇らしげに視線をこちらに送ってきた。

私は軽くうなずいて、再び竿を水面に伸ばした。エメラルド色の淵の奥には、おびただしい数のイワナたちがユラユラと泳いでいるのが分かる。

突然、上流の藪からガサガサと音がして、熊のような巨体が川に突進していった。ザバザバと飛沫をたてて流れを横断し、ヤマセミと同様に右手の森へ消えていった。若干熊よりは小さく、犬よりも大きい。色は灰色で、脚は細めだった。マブタに残った残像から、私は今の動物が何であったかを分析した。

もちろんその時、恐怖心がないわけではなかつ

たが、あまりにもとつさの出来事であつけにとられてしまった。お地蔵様のように立ちつくす私の脳味噌が数秒後にはじき出した結論は、《カモシカ》だった。ウシ科の哺乳類動物で、特別天然記念物であるあのニホンカモシカ！

こんなに身近に見られるとは、さすが秋田マタギの本場。この調子では、ツキノワグマやクマゲラ、カラウンだつてご対面できるかも知れない。

「Mさん、今の見た？」と上流のM氏へ声をかけると、岩の上で不動明王のように竿を伸ばす彼は、驚いた様子もなく大きくうなずいた。カモシカかどうか確認しようと近づいた瞬間、穂先がギューンとしなつた。強い引きで、下流へ上腕がひっぱられる。大きい、糸が切れるかもしれない。竿を両手で持って、五分ほど格闘した末に、敵はやつと陸へ上がってきた。四十センチ弱のイワナだった。

エラに指を入れて高く掲げ、上流と下流の両氏に示したが、二人とも目印に視線が集中して、こちらに気づかない。私は諦めて、その丸々としたイワナの解体作業を始めた。

◇ ◇ ◇

三十分ほど釣り歩く間、私たち三人はヤブをくぐりぬけ、岩場を登り砂防ダムを越えた。ダムの少し上流で、川は二本に分かれていた。「右は細いから、左手が本流でしょう」とM氏がいい、数歩先へ出て上流をうかがつた。腰をかがめて、身軽に川岸を進んでいくその足がヤブの手前どとまった。何かを発見して、一瞬驚いたという感じだった。

「こつち、こつち」と低い声で手招きをする。私とA氏は、抜き足差し足でそこへ近づいてい

た。

「クマかな？ずっと先の、倒れた木の下で動いているでしょう」とM氏は平然とした様子だ。

「何だっぺな。いくつも動いているようだし」A氏は声をこわばらせて、上流を凝視した。

「クマじゃないね。水中に潜ったりしているし。ラッコかなあ」と私は引き攣つた顔で冗談を言った。

M氏は笑いもせず上流へ進み、アシのヤブが終わった辺りで再び足を止めた。風倒木の下を見つめる表情が、急に柔らかくなった。

「子供たちだ！ 潜ってヤスで魚を突いているんだ」と嬉しそうな声を上げた。

「魚捕りか、さすがに秋田だな」とA氏も楽しそうな表情に変わった。

なるほど、よく目を凝らしてみれば水泳パンツ一丁で、水中メガネをかけた子供たちが木の下で潜っている。近づいていくと、子供たちの数は三人で、中学生ぐらいであることが分かった。

「何を捕ってるんだ？」とM氏が訊ねると一番大きな中学生が、

「イワナとヤマメです。昨日は四十二センチのイワナを捕りました」と手に持った小枝を差し出した。そこには、二十五センチほどの形のいいヤマメが串刺しになっていた。

「この川は魚がいっぱいいるね」と私が言うと、別の一人が自分のことをほめられたかのような顔で、

「うん、五十五センチのイワナを捕ったこともある」とニコニコして応えた。

「この上流は、釣れるかな？」とM氏。「はい、いっぱい釣れると思います」とリーダー

一格が自信たっぷりに言った。

「五十五センチかあ。すごい川だね」と私がほめると、三人とも顔をほころばせた。

◇ ◇ ◇

私たちは、上流へ釣り進みそこそこの釣果をあげて車へ戻った。砂利道を歩いている最中、重いビクの中で半死状態の魚が何度もゴソゴソと体を痙攣させていた。

「河原で魚をばらさなくちゃ」とA氏は車のドアを開けながらつぶやいた。中学生たちと会ってから、三人とも二十五センチクラスのイワナを何匹も釣った。旅館へ戻る時間を考えて、内臓を取り出す作業は車へ戻ってからすることに決めた。午後五時。七月のその時刻は、まだまだ真昼のようだ。ビクを手を河原へ向かう途中、上流の方で何かが動いているのが見えた。

「また川に何かがいますね」と私はA氏に話しかけた。

「今度は何だつべな。ああ、あれは水ガキだよ」とのんびりした口調で答えた。水ガキとは、長良川で遊泳したり魚捕りをする子供たちを、女流溪流師の天野礼子が尊称した言葉である。昭和三十年ごろまでは日本中どこにでもいたが、今では長良川とか四国の四万十川とか限られた清流にしか棲息していないと、彼女は嘆いていた。

確かにそこにいたのは、二人の水ガキだった。水中メガネをかけヤスを手に、岩場のプールを覗いている。

「何が捕れるの?」と私が聞くと、緑色のパンツ姿の一人が顔を上げた。

「カジカとイワナです。ヤマメもいます」とおとなしい感じで返事をした。

「上流でも、三人の中学生が捕っていたよ」

「はい、あれは先輩たちです。倒れた木の下だとたくさん魚が捕れるから…」

「じゃあ、君たちは見習中か」とM氏は愉快そうに笑った。

「はい、まだ中一ですから。ここだと、小さいイワナとか、カジカがほとんどです」

「せっかくここで会ったんだから、記念写真を撮ろうよ」と私は二人に言った。

「はい」と水ガキはペコリとお辞儀して石の上に立った。M氏が気を利かせて、カメラのシャッターを押してくれた。

私は少年の名前と住所を聴き、後で送ると約束をした。彼らは岸に上がり、置いてあった二台の自転車に乗って帰っていった。

「倒れた木の下に魚がいるっていうのを、知ってたんだなあ」とA氏は感心していた。

「風倒木は、イギリスでは《ナースログ》って言うんですよ。倒れた木が腐り、そこにコケが生えたり虫が発生したりして、鳥や魚や小動物が集まる。ナースログは、森を育て川を看護するという意味からそう呼ばれるんです。風倒木は人間の目から見れば、材木にもならないし川をささぎる邪魔な存在に映るけど、自然界にとっては大切な存在。一見無駄であっても、その本質は無駄じゃないというわけです」M氏の立て板に水の解説が締めくくった。

あの子供たちは、川で遊びながらそのことを自然界から学んでいた。肌でそれを知ったというべきだろうか。そんな知恵は学校では教えてくれないし、大半の大人も忘れてしまっている。都市部の中学生たちのほとんどが、偏差値の激流にもが

いている。その現状と較べて、何とのびやかで心豊かな日常なのだろう。

数日後、私は出来あがった写真に手紙を添えてメッセージを送った。

◇ ◇ ◇

おかげさまで、役内川での釣りは大変楽しいものになりました。秋田へ来たのはこれで二度目ですが、役内川の澄み切った水の流れと濃い魚影は極めて貴重なものでした。

私は、溪流釣りをしながら栃木県や福島県、岩手県などのいくつもの川や山を歩いています。その中でも、役内川の流れは最高のもので、多くの感動が川に満ちていました。君たちのような少年が水に潜ってヤマメやカジカ、イワナなどを捕まえている姿を実際に見たのも初めてです。『釣りきち三平』の作者・矢口高雄の『つれづれの記』にはそのことが書かれています。日本全体から見れば大変珍しいことだと思います。

現在のほとんどの中学生は、塾通いや電子ゲームなどに時間を費やし、外で自然と遊ぶことはしなくなっています。また、遊びたくても、そのような自然が身近にはありません。君たちがあのように水と魚たちと触れあえるということは、見方によっては大変な贅沢なことなのです。雄勝町は、冬の厳しさとか過疎の問題とか、不便なことがあるかも知れません。しかし、それを気に掛けるよりも、現在の豊かな自然環境を誇りとして暮らすべきだと思います。《自然》が人間に教えてくれることには、時として学校の勉強よりも大切な知恵が含まれていることがあります。

まだ中学一年生で、そのへんの実感は少ないかもしれませんが。でも、だんだん大人になって地域



のことを考えるようになるとき、そんな視点が君たちの心の中に生まれることでしょう。

雄勝町の豊かな自然が、いつまでも残ることを期待します。

川原で撮った写真を同封します。上流で先輩たちの魚釣り風景を撮ったものもありますので、渡してください。

追伸

大役内川のことを少し教えてください。

① 川に入って魚が捕れるのはいつからいつまででしょう？（雪代と禁漁期間の関係など）

② 大人たちはどんな魚捕りをしているのでしょうか？（釣り、投網、仕掛け網などの方法）

③ 溪流魚の他にどんな魚がいるのでしょうか？（ヤマメ、カマツキ、カマツキ、その他）

④ 川で見た動物には、どんなものがあるのでしょうか？（ニホンカモシカ、ツキノワグマ他）

⑤ 釣り人に迷惑している点はどんな点でしょうか？（ゴミ、無断駐車、作物荒らしなど）

よろしくお願いします。

◇◇◇

数日後、水ガキからの手紙が来た。

前略 お手紙ありがとうございます。写真の写りもよく、きれいでした。さっそくですが、質問にお答えします。

① は、川に潜って魚をとれる期間は、早くて七月下旬～八月下旬、おそくとも七月下旬～八月下旬となっています。釣り人が多くなるには、アユ釣りの解禁が過ぎてからです。

② では、ほとんど四、五人が協力して川をせき止め、それから手づかみでとります。一回で

二百匹ぐらい（見つかると取り調べられます）とれます。網ではほとんどやりません。

③ の魚の種類は、溪流魚をふくめて「イワナ・ヤマメ・アユ・カジカ・ウグイ」が主です。ヤツメウナギはいません。

④ は、カモシカ・イタチ・キツネです。

⑤ は、ほとんどありません。

追伸

小学校はプールがないので、夏休みは指定された川で泳ぎます。この小学校では、指定されているところが四つあります。

◇◇◇

私は、何度もその手紙を読んだ。澄みきった流れを思い浮かべながら、今度行くときはあの水ガキたちと一緒に、ナースログの下に潜って魚を捕ってやろうと考えていた。

（了）

今泉 文彦 石岡市長

著書「あしたの会さと風」他

編集後記

「ふるさと風」の100号記念紙として原稿の依頼をし、寄稿頂いた原稿を読みながら、ふるさと風も、毎月の会報紙とは別に、年一回程度の別冊ふるさと風として、普段に書けない文章

を発表する場を作ってもいいのかなと、この別冊風の会第二部を編集しながら、思ってみた。

何かを思いつき、それを実行するとなると又、負担を背負う事になってしまう。しかし、何かを始め、それが起点となって次への広がりが出てくるということは、最初に始めた何かに大きな必然性が生れて来たということ、負担は別にしてよろこぶべき事なのだろうと思う。

何かを始め、活発に活動を始めると、そこには必ず枝が伸びて、分科会が出てくるものがある。もしそこに何も枝葉が伸びず、分科会が生れないとすれば、元の会は全く活性がないということが出来る。

このふるさと風も100号記念が終わると、脱落する者も出てくるのかも知れない。そうしたとき、残る者達が新たな気持ちを持って進むべき枝葉を伸ばして置くことは非常に重要な事である。

ただただ一つのものに固執するのではなく、柔軟に自由自在に風を受け、揺れる枝葉を持つこと、持たせることは取り敢えず今は編集する者の役割なのだろうと思う。

その意味では、別冊という形で100号記念紙を持てたことは意味深いものだと思う。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

## ふるさと風の会会員募集中!!

会報「ふるさと風」も、お蔭様で創刊100号を迎えました。

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くこのふるさとを自慢したいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

### 風の言葉絵同好会参加者募集

全てが自由で自在であれ、のふるさと風の会から生まれた、兼平智恵子の風の言葉絵。この新しい自分表現の「風の言葉絵」を楽しむサークルでは、一緒に言葉と絵を楽しむ参加者を募集しています。

詳しくは、兼平智恵子(☎0299-26-7178)へお問い合わせください。

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

## ことば座「朗読教室」受講生募集

朗読は演劇です。

朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じることです。

物語とは、はじめに言葉があって紡がれたのではなく、はじめに作者の心があって言葉に紡がれたものです。物語(詩)を朗読に表現する時は、言葉に紡がれた作者の心の真実をうけて、表現者として劇しく(はげしく)そのドラマ(物語)を演じることが必要です。

何かで自分表現をしたいと考えておられる方、朗読による自分表現を考えて見ませんか。

演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読で自分表現を、また朗読で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。

月二回程度の授業を考えております。(受講料月額3,000円)

脚本・演出家の白井啓治がに指導します。

連絡 080-3125-1307(白井)